

## 「神のさばきの時は来た」②

我々は今、全世界のすべての人が知るべき、地球最後の使命、三重の使命をシリーズで学んでいる。

第一天使の使命に、第一にして最も重要な福音を見ることができた。

第一天使の使命は、「神をおそれよ」から始まっている。神をおそれる、神に対する畏敬、崇敬は、神を知ることから始まる。人間の拝むべき神は、天と地と海とその中のすべてを造られた創造者であることが第一天使の使命にある。

創造主なる神は、愛の神である。聖書の中心聖句と言われるヨハネ 3:16 にヨハネは書いている：「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである」と。一人も滅びることを好まない神は、最後の滅亡から救うために強力な愛の最後の警告として第三天使の使命を与えておいでになる。

先回は、神の裁きの時と、神の裁きは永遠の福音であることを学んだ。1844年からまず死んだ義人の裁きが始まったことを知った。

ヘブル 9:27 に「一度だけ死ぬことと、死んだ後さばきを受けることとが、人間に定まっている」と書いている。死んで後さばきを受けることは、1844年から始まった。しかし、キリスト再臨まで死なない人々がいる。いつ生きている人々の番になるのだろうか？

### 1. 生けるものの裁きはいつから始まるか？

その日時は知ることができない？

大争闘下 224 に次のように書いてある：

「審判は今、天の聖所において進行中である。長年にわたって、この働きは続けられてきた。間もなく—その時がいつかはだれも知らないが—生きている人々の番になる。」

だから、生ける者のさばきにいつ移るか誰も知らないと言主張する人たちがいる。勿論、その日、その時は誰も知らない。1844年 10月 22日のように何年何月何日とは誰も知らない。そのような (definite time, 特定の時) は、それ以後はないと言者は言っている(1 SM188)。

上記の大争闘の文は誤訳である。原文では how soon 「どれほどすみやかに生ける人の番になるかだれも分からない」となっている。さばきが「いつ生ける者の番になるかは誰も知らない」という意味ではない。

「間もなく」ということは、大争闘の本が預言者によって最後にチェックされた時は、1911年であった。ということ、1911年の時点でまだ生ける者のさばきに移っていなかったのである。「間もなく」ということは未来を指している。

「この警告を心にとめている者は、暗黒のうちに取り残され、その日が不意に彼らを襲うことはない。しかし、目をさましていない者にとっては、「主の日は盗人が夜くるように来る」のである (テサロニケ第一 5:2,3-5 参照)。」大争闘下 27

生けるものの裁きが始まるのは日曜遵守令が出てから。

### 1. 聖書の証明

まず、黙示録 14:6-12 の三天使の使命の文脈を見てみよう。確かにこの三天使の使命は、1833年からウィリアム・ミラーが述べ伝えはじめた。そして 1844年 10月 22日から死んだ義人の裁きは始まった。それ以来「神の裁きの時は来た」と我々は述べ伝えてきた。これは揺り動かすことのできない真理である。

しかし、聖書の文脈を見ると、もっと直接的には、黙示録 13章の事件が起きる時に後の雨の

力をもって述べ伝えられるべき最終の使命である。すなわち、小羊のような角をもったプロテスタントアメリカが、先の獣(ローマ・法王教)の権威のしるしである日曜遵守令が全世界に強要されるという事件が起きる時に大いなる叫びとなって述べ伝えられる。(黙示録 18:1-5)。すなわち「悩みのときの開始にあたって、われわれが出て行ってもっと徹底的に安息日を宣べ伝えたとき、われわれは聖霊に満たされた」初代文集 172。

この時こそ、生ける者の裁きの時である。その証明は？黙示録 13:8 を見よ。

「地に住む者で、世の初めからほふられた小羊のいのちの書に、その名をしるされていない者はみな、この獣を拜むであろう」(欽定訳、明治訳、大正訳、弥永訳)

日曜遵守令は、すべての人の名が命の書に記されるか、それとも獣を拜んで滅されるかのどちらかに決定する事件ある。すべての人の運命が決定される裁きの時である。

## 2. 証の書の証明

預言者、E.G.ホワイトは次のように言っている:

「法令が發布されて印が押される時、彼らの品性は永遠に清く、しみのない者となるであろう」 5T216

「主は私に、恵みの期間が閉じられる前に、獣の像が形作られるということをはっきり示された。なぜなら、それは神の民のための大いなるテストだからである。それによって彼らの永遠の運命が決定されるであろう。… [黙 13:11-17 を引用] … これは神の民が印される前に受けなければならないテストである。」 Letter 11,1890 スタディバイブル (新) 585,586

「両方とも収穫まで育つままにせよ。その時、主が毒麦を集めて焼き、また麦を天の倉に集めるためにご自分の刈り取る者を送られる。さばきの時は最も厳粛な時である。その時に主はご自分の民を毒麦から集められる。同じ家族の者が分かたれる。義人には印が与えられるであろう。関わっていた者(悪人たち)は神からの永遠の分離の印が押されるであろう。」TM 234,235。大争闘下 374,375 最後のテスト。

上記の文から次の事がはっきりする:

- ① 生ける者の裁きは、まだ未来のことである。
- ② 法令が出されて、獣の像が形作られるときは、永遠の運命が決定される時である。
- ③ その時はさばきの時で、神の印か獣の印かのどちらかに永遠に分離される時である。
- ④ 生ける者のさばきは日曜遵守令が強要されることから始まる。
- ⑤ 神の印を受けるという事は、品性が永遠に清くされたことの証拠である。

もう一つのしるし—隠されていた十戒が持ちだされ、全世界に証がなされる。

人間が神の律法を法令をもって破り、サタンが「自分の時が短いことを知り」6千年の知恵と術を結集して働きを展開するとき、神も著しく働かれる(詩篇 19:126)。その時、ご自分の権威の印、十戒が幾千年も隠されていたところから持ち出されて証をする。

「神のみこころが明らかに示された義人たちがまだエルサレムに残っていたが、その中のある人々は、十戒の戒めが書かれた石の板を納めた聖なる箱が、乱暴な人々の手に入らないようにしようと決意した。彼らはそれを決行した。彼らは嘆き悲しみつつ、箱をほら穴の中に隠したのである。箱はイスラエルとユダの人々の罪のゆえに、彼らから隠されて、再び彼らにもどることはないのであった。その箱は今なお隠されている。それはそこに隠されて以来、人手に触れたことはないのである」国指導下 70。

「神殿が破壊される前にイスラエルの誇りであり、彼らが神に対して罪を犯していた間に偶像礼拝で満たした神殿の破滅について、神はご自分の忠実な僕たちに知らせてあった。また、イスラエルの捕囚についても彼らに示していた。これらの義人たちは、神殿が破壊される直前に石の板の入っている聖なる箱を嘆きと悲しみのうちに移し、イスラエルの人々から覆われるため洞窟に隠した。彼らの罪の故にそれは二度と彼らに戻ってこなかった。

その契約の箱はいまなお隠されている。隠されて以来それは、一度も妨げられていない」(1864、SG,Vol.4:114-5 S.of P.Vol 1: 414 (1870)。

「『主〔キリスト〕はシナイ山でモーセに語り終えられたとき、あかしの板二枚、すなわち神が指をもって書かれた石の板をモーセに授けられた。』これらの石の板の上に書かれたことは、どれも除去することができなかった。律法の貴重な記録は契約の箱に置かれ、尚もそこで、安全に人類から隠されている。しかし神がお定めになった時に、戒めの無視と偽の安息日を守る偶像崇拜に対抗して、全世界への証となるため、神はこれらの石の板を持ちだされるであろう」(MS 122,1901年)。

「神の律法の不変性に関する証拠はふんだんにある。それは決して抹消されたり、破壊されることのないように神の指で書かれた。神がそれらをお書きになったままの状態、石の板は神によって隠されていて、大いなる審判の日に提示される(取り出される)ことになっている」(RH 1908年3月26日)。

「審判が行われ、数々の書物が開かれる時、すべての人はその書に書かれている事柄に従って裁かれるであろう。その時、その日まで神によって隠されていた石の板が、義の標準として全世界に提示されるであろう。その時男女は、彼らの救済の必要条件が神の完全な律法への服従であることを悟るであろう。罪の弁解ができる者は一人もいなくなる。その律法の義の原則によって、人々は生か死かの判決を受けるであろう」(同 1909年1月28日)。

「神はご自分の契約をお破りにならず、またみ口から出たことをお変えにならない。神の言葉は、神のみ座のように変わることなく、永遠に固く立つのである。審判のときに、神の指によって明らかに書かれたこの契約が持ち出されて、世界は無限の神の審判廷に引き出されて、宣告を受けるのである」 国指上 155。

## 2. さばきの経験、聖所の清めの時、144,000の出現の時

日曜遵守令の時は、裁きの時である。「法令が発布されて印が押される時、彼らの品性は永遠に清く、しみのない者となる」(5T216)のであるから、完全に罪が除去され、永遠に罪から解放される時である。聖所の清めの時である。だから永遠の福音である。

黙示録 14 章に「品性は永遠に清く、しみのない者たち」144,000 のことが書いてある。彼らの描写を読んでみよ。

144,000 の特徴：大争闘下 430

み座の前の、水晶のように透きとおった海、あの、火のまじったガラスの海—神の栄光でまばゆく輝いているところの、一の上に、「獣とその像とその名の数字とにうち勝った人々が」集まっている。シオンの山の小羊とともに、人々の間から贖われた彼ら、すなわち、十四万四千が、「神の立琴を手にして」立つのである。また、大 水のとどろきのような、激しい雷鳴のような、「琴をひく人が立琴をひく音」のようなものが聞こえる。そして、彼らは、み座の前で新しい歌をうたう。この歌は、十四万四千以外のものは、だれも学ぶことができない。それは、モーセと小羊の歌、すなわち、救いの歌である。十四万四千のほかは、だれもその歌を学ぶことができない。なぜなら、それは彼らの体験—他のどの群れもしたことのない体験—の歌だからである。「小羊の行く所へは、どこへでもついて行く。」彼らは、地上から、生きている者の間から、天に移された者たちで、「神と小羊 とにささげられる初穂」とみなされる(黙示録 15:2,3 ; 14:1-5)。「彼らは大きな患難をとおってきた人たちであって」、国が始まって以来かつてなかったほどの悩みの時を通過してきた。彼らは、ヤコブの悩みの時の苦しみに耐えた。彼らは、神の最後の刑罰がくだる中を、仲保者なしで立った。しかし彼らは、「その衣を小羊の血で洗い、それを白くした」ために、救われた。「彼らの口には偽りがなく、彼らは」神の前に、「傷のない者であった。」「それだから彼らは、神の御座の前におり、昼も夜もその聖所で神に仕えているのである。御座にいますかたは、彼らの上に幕屋を張って共に住まわれるであろう。」彼らは、地上が飢饉と疫病で荒廃し、太陽が激しい熱で人々を焼くのを目撃した。そして、彼ら自身も、苦しみ、飢えかわいたのであった。し

かし、「彼らは、もはや飢えることがなく、かわくこともない。太陽も炎暑も、彼らを侵すことはない。御座の正面にいます小羊は彼らの牧者となって、いのちの水の泉に導いて下さるであろう。また神は、彼らの目から涙をことごとくぬぐいとって下さるであろう」(黙示録 7:14-17)。

#### 国指下 193-196

ヨシュアとみ使いに関するゼカリヤの幻(ゼカリヤ 3:1-8)、最後の場面における神の民の経験に、特別に当てはまる。その時、残りの教会は大きな試練と苦悩に陥る。神の戒めを守り、イエスを信じる信仰を持っている者に対して、龍とその軍勢は激しい怒りを発する。サタンは世界を自分の家来だと思っている。彼は多くの自称キリスト者たちさえ支配してしまった。しかしここに、小さい群れが彼の主権に抵抗しているのである。もしサタンが、彼らを地上から一掃することができるならば、彼の勝利は完璧となる。サタンは異教諸国を動かしてイスラエルを滅ぼそうとしたように、近い将来、地上の邪悪な国々を扇動して、神の民を滅ぼそうとするのである。人々は神の律法に背いて、人間の布告に服従するように要求されるのである。

神に忠実に服従する人々は、脅かされ、攻撃され、追放される。彼らは、「両親、兄弟、親族、友人にさえ裏切られ」、殺されるであろう(ルカ 21:16)。

神のあわれみだけが、彼らの唯一の希望である。祈りが彼らの唯一の防御である。ヨシュアがみ使いの前で嘆願したように、残りの教会は、心へりくだり揺るがぬ信仰をいできて、彼らの助け主イエスによって、赦しと救出を嘆願するのである。彼らは自分たちの生活の罪深さを、十分認めている。彼らは自分たちの弱さと無価値さを知っている。そして、今にも絶望するばかりである。

誘惑者サタンは、ヨシュアのそばに立ったように、彼らのそばに立って告発する。彼は、彼らの汚れた衣、彼らの品性の欠陥を指摘する。彼は、彼らの弱さと愚かさ、忘恩と罪、彼らがキリストと似ておらず、贖い主の栄えを汚したことを示す。彼は、彼らの状態は絶望的で、彼らの罪のしみは洗いきることができないと思わせて、恐怖に陥れようとする。彼は彼らの信仰を失わせて、彼の誘惑に屈服させ、神への忠誠から引き離そうと望むのである。

サタンは自分が神の民に犯させた罪を正確に知っている。そしてサタンは、彼らが罪を犯したから神の保護を受けられなくなったと言って告発し、自分には彼らを滅ぼす権利があると主張するのである。彼は彼自身と同様に、彼らも神の恵みから除外されるべきであると言うのである。「この人々が、天におけるわたしの場所を占め、わたしといっしょになった天使たちの場所を占める人々であろうか。彼らは、神の律法に従うと言っている。しかし、彼らはその戒めを守ったであろうか。彼らは神を愛するよりは、自己を愛したのではなからうか。彼らは神に仕えるよりは、自分の利益を重んじたのではなからうか。彼らは、この世の物を愛したのではなからうか。彼らの生涯を汚した罪を見よ。彼らの利己心、互いに対する彼らの悪意、憎しみを見よ。神は、わたしとわたしの天使たちをみ前から追放しながらも、なお、同じ罪を犯したこれらの人々に、報いをお与えになるのであるか。ああ主よ、あなたはそのようなことを行っては、公平ではない。正義は彼らに対しても、宣告が発せられることを要求する」、とサタンは言うのである。

しかしキリストに従った人々は、罪を犯しはしたけれども、全的に降伏してサタンの手下たちに支配されてはいなかったのである。彼らはその罪を悔い改めて、謙遜と悔恨の念をもって主を求めた。そして助け主であられるイエスは、彼らのために嘆願されるのである。彼らの忘恩によって最もひどい取り扱いを受けられたかた、また彼らの罪を知るとともに、その悔い改めをも知っておられるかたが言われる。「サタンよ、主はあなたを責めるのだ。わたしはこの人々のために、わたしの生命を与えた。彼らは、わたしのたなごころに彫り刻まれている。彼らの品性に不完全なところがある。彼らは、努力して失敗したこともある。しかし彼らは悔い改めた。そしてわたしは、彼らを赦し受け入れたのである」。

サタンの攻撃は強烈で、その欺瞞は陰険である。しかし主の目は、神の民を見ている。彼らの苦難ははなはだしく、炉の火は今にも彼らを焼きつくすかのように思われる。しかしイ

エスは、彼らを火で練られた金のように取り出される。彼らは、世俗的なところが取り去られて、キリストのかたちを完全に表すようになるのである。

時には主はご自分の教会の危機と、敵が教会に与えた被害を忘れたかのように思われることがある。しかし、神はお忘れになったのではない。この世において、教会ほど神にとって大切なものはない。世俗的政策によって教会の記録が腐敗することは、神のみこころではない。神はご自分の民が、サタンの誘惑に打ち負かされるままに放置されない。神は、神を誤り伝える人々を罰せられるが、心から悔い改めるすべての者に対して恵み深いのである。力とキリスト者的品性が啓発されることを、神に叫び求める者に、神はあらゆる必要な助けをお与えになるのである。

終末の時にあって、神の民は地に行われる憎むべきことを、嘆き叫ぶのである。彼らは涙を流して、神の律法をふみにじる危険について悪人たちに警告を發し、言語に絶した悲しみをもって、主の前にへりくだり罪を悔いる。悪人たちは彼らの悲しみをあざけり、彼らの厳粛な訴えを嘲笑する。しかし、神の民の苦悩と屈辱とは、罪の結果失われた品性の力と高貴さを、彼らが回復しつつある間違いのない証拠である。彼らが罪のはなはだしい邪悪さははっきり認めるのは、彼らがキリストに近づき、彼らの目がその完全な純潔さを凝視するからである。柔和と謙遜が、成功と勝利の条件である。栄光の冠は、十字架のもとにひざまづく者を待っている。

神に忠実に仕え祈っている者は、いわば神の中に閉じ込められたようなものである。彼ら自身は、自分たちがどんなにしっかりと保護されているかを知らない。この世界の統治者たちは、サタンにそそのかされて、彼らを滅ぼそうとする。しかしもし神の民の目が、ダタンにおけるエリシャのしもべのように開かれるならば、神の天使たちが彼らの回りに陣をしいて、暗黒の軍勢を阻止しているのを見るであろう。

神の民が神の前で心を悩まし、心が純潔になることを嘆願するときに、「彼の汚れた衣を脱がせなさい」という命令が出される。そして、「見よ、わたしはあなたの罪を取り除いた。あなたに祭服を着せよう」という励ましの言葉が語られる(ゼカリヤ 3:4)。キリストの義というしみのない衣が、試練と誘惑に耐えた忠実な神の民に着せられる。さげすまれた残りの民は栄光の衣を着せられ、世俗の腐敗に二度と汚されることはないのである。彼らの名は小羊の命の書に書き留められて、各時代の忠実な者の中に加えられるのである。彼らは、欺瞞者の策略に抵抗した。彼らは龍がほえても、忠誠を失わなかった。今や彼らは、誘惑者の計略から、永遠に安全なものとなった。彼らの罪は、罪の創始者の上に移された。「清い帽子」が彼らの頭にかぶせられた。

サタンが告発をしていたときに、目には見えないが、聖天使たちがあちこち行きめぐって、忠実な人々に生ける神の印を押していた。この人々は、その額に父なる神の名を記されて、小羊とともにシオンの山に立つのである。彼らはみ座の前で新しい歌を歌うが、それは地上から贖われた十四万四千人のほかは、だれも学ぶことができない。「彼らは、……小羊の行く所へは、どこへでもついて行く。彼らは、神と小羊とにささげられる初穂として、人間の中からあがなわれた者である。彼らの口には偽りがなく、彼らは傷のない者であった」(黙示録 14:4)。

ここでみ使いの言葉が完全に成就する。「大祭司ヨシュアよ、あなたも、あなたの前にすわっている同僚たちも聞きなさい。彼らはよいしるし(men wondered at 驚嘆すべき人々)となるべき人々だからである。見よ、わたしはわたしのしもべなる枝を生じさせよう」(ゼカリヤ書 3:8)。

キリストは彼の民の贖い主、救い主としてあらわされる。残りの民の旅路の涙と屈辱が、神と小羊の前で喜びと誉れに変わるときに、人々は彼らを見て、まことに驚き怪しむ(驚嘆)のである。「その日、主の枝は麗しく栄え、地の産物はイスラエルの生き残った者の誇、また光栄となる。……シオンに残る者、エルサレムにとどまる者、すべてエルサレムにあって、生命の書にされる者は聖なる者となえられる」(イザヤ 4:2-4)。

● 裁きにおいて、聖徒たちに国と主権と全天下の国々の権威が与えられる。ダニエル 7:27

- 裁きにおいて、神の宮、住まい、聖所は清められ、回復される。ダニエル 8:14、エペソ 5:27

### 3. さばきに備えよう

昔、イスラエル人が贖いの日が告げられたとき、どうしたであろうか。

1. 働きを止めた—自分の業をやめてイエスの功績にのみ頼る。行いによる義を止める。
2. 断食をした—節制、健康改革に生きる。
3. 聖所の周りに集まった—一天の聖所でイエスの大祭司としての立場と働きを理解して、協力する。何よりも重要。大争闘下 222。

「あなたがた、恥を知らぬ民よ、共につどい、集まれ。すなわち、もみがらのように追いやられる前に(法令が出る前に〔欽定訳〕)主の激しい怒りがまだあなたがたに臨まない前に、主の憤りの日がまだあなたがたに来ない前に。すべて主の命令を行うこの地のへりくだる者よ、主を求めよ。正義を求めよ。謙遜を求めよ。そうすればあなたがたは主の怒りの日に、あるいは隠されることがあろう」ゼパニヤ 2:1-3(欽定訳)(RH1908,11-19)。

「シオンでラッパを吹きならせ...民を集め」ヨエル 2:15,16

4. 魂を悩ました—心の深い探索 大争闘下 224。

「あなたがたは聖会を開き、魂を悩まし、主に火祭をささげなければならない。...

すべてその日に魂を悩まさない者は、民のうちから断たれるであろう」レビ 23:27,29

「だから、自分の罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて本心に立ちかえりなさい」使徒 3:19。

- ・エステルの時。エステル 4 章 ユダヤ人の危機

危機が近づいてきた!

- ・三重の合同運動—プロテスタント、カトリック、心霊術
- ・災害続発→ますます頻繁になる
- ・道徳頹廢
- ・アメリカ発世界経済危機
- ・危機に鈍感、無関心がイスラエル人をバビロンに捕虜とさせた。
- ・危機感の喪失がユダヤ人をエルサレム滅亡へと導いた。
- ・現代霊的イスラエルの危機感は？

「準備しなさい、準備しなさい、準備しなさい」初代文集 142。:

必読書:

- ・現代の真理
- ・人間の尊厳
- ・聖所の回復
- ・聖所は清められる
- ・セブンスデー・アドベンチストの教え検証

サンライズ・ミニストリー発行